アンゴラ、中国で救援活動

世界で大地震など災害が相次いでいる。民族対立などに根ざした内戦も頻発している。内戦や家を失い、苦難の生活を余儀なくされた人々を救おうと、国際医療ボランティアのAMDA（本部・岡山市、看護発代表）から医師や看護婦らが飛び出していく。シリーズ企画「国際貢献パワー・おかやまから動く AMDAからの報告」の四回目は、医師らとともに現地に駆けつけ、診療活動を舞台裏で支えるAMDAのコーディネーターの活躍を紹介する。（大中敬彰記）

国際貢献パワー おかやまから動く

アジア医師連絡協議会
AMDAからの報告
シリーズ企画 No.4

コレラにマラリア、肺炎…
廃虚の病院再建、難民に笑顔

アンゴラ内戦

栄養失調の子供も

菊池和雄。AMDAで「コーディネーター」をつとめるボランティアだ。

横浜市出身。44歳。通信工事の技術者。内戦が続くアンゴラ（南西アフリカ）での帰還難民緊急救援プロジェクトで、昨夏から病院の再建や住民の保健状態の調査などにあたり、今年1月27日に帰国した。

2月初め、岡山市橦瀬のAMDA本部に菊池の姿があった。久し振りの日本の冬。本部の仕事を手伝いながら、“岡山での骨休め”を楽しむ。

その菊池のもとに、東京・国分寺市から懐かしい顔が訪ねてきた。砂川多香子。32歳。菊池とともにアンゴラでのAMDAプロジェクトに昨年11月まで参加した看護婦だ。

熱帯のアンゴラ。人口約千二百六十万人。真っ赤な夕陽が大西洋に沈み、首都ルアンダは緑の大木が街路を彩る。だが、この美しい国が、20年も続く内戦で荒れ果てている。

「アンゴラの人たちは貧乏だろうか」。二人は再会を喜びながら、今なお苦難に喘ぐ隣国の難民らに思いをめぐらせた。

＊＊＊

ルアンダは人口約二百万人。それが国内難民の流入で三百万人にも膨れ上がっている。

貧しい生活。上半身裸の子供も。水道はあるが二日に一回しか水が出ず、ビルの二階以上には上がらない。下町は生活排水をたれ流し。

一衛生状態は日本の戦後のようなところもある」と菊池。11月から4月の雨期にはコレラがはやる。

昨年7月にアンゴラ入りした菊池は、AMDAの診療拠点探しに奔走した。他のNGOが入っていない地域を選びたい。だが、現政府の支配地と反政府勢力の支配地が複雑に入り乱れ、治安は悪い。8月に入った砂川らと力を合わせ、ルアンダから北約二百キロ“ウンザボンボ”という周辺人口十万人の町に、廃屋同然の病院が見付かったのは、もう9月後半になっていた。

＊＊＊

平屋の病院は破壊つくされていた。屋根があって、れんがの壁があるくらい。ベッド一つなく、電気もない。レントゲンも診療器具も、なにもなかった。

コレラにマラリア、肺炎、結核…。子供は栄養失調で老人のような顔をしている。

「とにかく、薬と医者がくれば助けられる人間がいる」

「百人救んでいるところを、六十人でも救えれば」

菊池らの連絡が岡山のAMDA本部に届き、看護婦らが医師らの選定を急ぐ。

10月中旬。大阪市と福岡県市から看護婦二人、ネパールから医師二人がかけつけてきた。

待望の診療が始まった。依然として、ベッドもない。手術はできず、投薬が主体。それでも訪れる患者は日ごとに増え、一日三百人を超えるようになった。

現地の公用語はポルトガル語だ。13年前に仕事でアンゴラにいた菊池は、少し話せる。薬やAMDAチームの食料、発電機の燃料など物資の確保、車のメンテナンス、政府との交渉などに走り回った。

＊＊＊

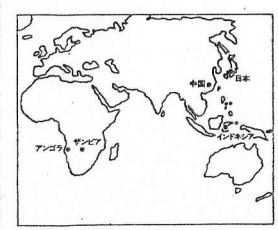
AMDAチームは無表情だったザンザボンボのこどもたちが、笑顔を見せだした。パイナップルやヤシ酒を持って来てくれる患者もいる。

アンゴラには日本の大使館などはない。AMDAはこのアンゴラ帰還難民緊急救援プロジェクトに医師、看護婦、コーディネーターら計六人を派遣（2月末現在）した。その一人、カナダ人の医師は、AMDAの機関誌「国際医療協力」に、こう投稿している。

「アンゴラでのAMDAの活動展開は、非常に軌道されている。人道援助の必要性が迫られている」ともあるが、この地域には世界の援助国である日本からの代表が他にいないということもある。「絶望的に窮り切っている」この地域に、大きな助けとなるであろう」

集まったアンゴラの患者らに名前を聞いてカルテを作成するAMDAの看護婦（右から2人目、横向き）

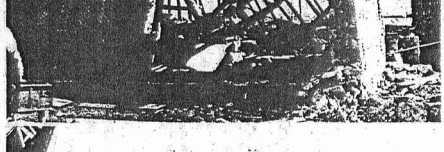
アンゴラでの活動を報告する菊池コーディネーター（中央、AMDA本部）



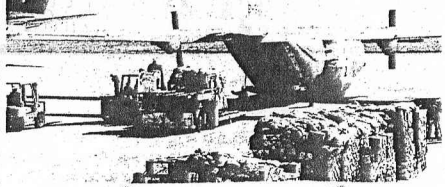
アンゴラ内戦

アンゴラでは50年代にポルトガル植民地からの解放運動が始まり、三つの解放線が誕生。75年に現政権のアンゴラ解放人民運動が独立宣言したが、他の解放戦線との内戦がぼっ発し、いったん和平が実現したものの再燃。94年、国連のアンゴラ監視団が発効し、国連アンゴラ監視団が活動している。

中国・大地震 マグニチュード7
厳寒に家失い、風邪まん延



無残に壊れた中国・雲南省の家屋



岡山空港から雲南省へ送られる救援物資

薬や毛布 岡山から急送

2月3日。中国・雲南省北部で大地震発生。マグニチュード7、死者二百五十二人、負傷者一万四千人、全壊三十八万戸。

AMDAの緊急救援プロジェクトが自動げすに始まった。

5日、第一陣出発。医師の岩永資隆（三重）＝岡山市＝ら三人が関西国際空港から飛び立った。

7日、第二陣出発。医師、看護婦ら計七人。その中に菊池も入った。菊池の岡山での“休み”はすぐに終わった。

11日、救援物資16トンを乗せたチャーター機が岡山空港から雲南省の昆明・昆明へ。抗生物質や点滴セット、それに衣料品、毛布、靴など岡山県民から寄せられた品物で、積み込みには主婦らボランティアがかけつけた。

被災地は昆明の北の山岳地帯。旦平レンガと木材の家屋は無残に倒れ、病院や学校は壊滅的な被害を受けた。夜は氷点下12度にまで冷える厳寒。食料と薬が足りない。廃虚と化した村で、毛布で過ごす人々は、まん延する風邪に苦しんでいた。

余震が続き、岩石や菊池らは現地に入れない。調査者がかろうじて入れる昆明で岩永は治療を手伝い、菊池は救援物資の仕分け作業などに出かけた。

菊池は二週間で帰岡、記者会見で「家屋や学校の再建は長期化が予想される」と報告した。

この震災で雲南省へ入ったNGOはAMDAが最初だった。雲南省政府から感謝状がAMDAに贈られ、菊池には「友民生局から栄誉章が贈られた。

＊＊＊

AMDAは今、多化を極めて いる。

【1月】旧ユーゴスラビアのボスニア・ヘルツェゴビナでの医療支援プロジェクトを実施。

【2月】雲南省緊急救援に続いて、菅波と医師山本秀樹＝岡山市＝が18日、アフリカのザンビアへ緊急医療プロジェクトで旅立つ。27日、中国・四川省と青海省の大雪災害で衣料など救援物資1トンを広州空港から発送。29日、インドネシア・イリアンジャヤで起きたマグニチュード7・0の地震被災者救援プロジェクト開始。

【3月】1日、四川省・青海省の大雪災害で救援物資1トンを広島空港から送る。

アジアの医師らが連携するAMDA。活動の舞台は広がり、中国にも初めて入った。

＊＊＊

菊池は、大手電気メーカーの契約社員として、アジアやアフリカで仕事をしていた。時帰国していた94年、ルワンダでのAMDAの救援活動を知り、AMDAに入った。

「自分の長い人生の中で、AMDAでの時は掛値のない時間です」と菊池。

3月1日、菊池はインドネシアへ飛び、救援活動を一週間ほどで帰岡。休むまもなく22日、再びアフリカへ出発する。

誰にでも出来ることがあるのでは

AMDA国際大学を岡山に

〝時代の要請〟に合った広い視野もつ人材育成

大学の成功祈る

国連事務総長
ブトロス・ブトロス・ガリ

拝啓　菅波先生

1996年1月29日

1995年度ブトロス・ガリ賞を受賞されたことに対し、もう一度お祝いを申し上げます。

あなたや、他の受賞者に対し、直接お渡しできなかったことを残念に思います。

あなたが岡山にAMDA国際大学の設立を開始されることは有望であり、最も推奨できるものと思います。

私はこの大学の最も重要な使命は、学問的専門知識と技術的熟練と、平和の推進と国際協力への強固な責任感とを適切に併せ持ち、特に非政府組織（NGO）を支持する人材を育てることにあると思っています。

このような目標は、任務を遂行するNGOや任意団体とますます協力する国連の目標とほとんど一致しています。

あなたは、アジアやアフリカの多くの国であなたが開拓した医療活動で突出した事例をつくってこられました。AMDA国際大学の生徒は、必ずやあなたの指導から非常に多くを学ぶでしょう。そして私は、彼らがこの組織に対して貢献することを期待しています。

あなたのこの事業の成功を祈念して。

敬具

列島が寒波に襲われた1月31日夕方。岡山市楢津の医院にあるAMDA本部に、一枚の英文ファクスが入ってきた。

発信元はニューヨーク。国連のマークが入ったそのファクスには、「ブトロス・ブトロス・ガリ」と署名がある。

「ガリ」＝世界の平和に心をくだく国連事務総長をのぞんである。AMDA代表の菅波茂（さん）＝医師、岡山市＝にあて、「AMDA国際大学」（仮称）構想を評価したうえで、「事業の成功を祈念して」と結んでいた。

＊　＊　＊

「AMDA国際大学」とは、AMDAが〝国際貢献のプロ〟養成を狙いに設立構想を進めているプロジェクトのこと。菅波が昨年夏に国連ガリ賞を受賞した縁で、「世界にも例がないNGOによる大学をつくる」（菅波）という構想を、ガリ国連事務総長が知っていたのだ。

「大学」では外国語を集中的に学び、国際法や社会学、宗教学も身に付ける。海外の難民キャンプや国連・国際機関で実習をするのか。

国境なき医師団（パリ）など世界に多くの医療NGOがある中で、AMDAは「緊急援助」が得意。大震災や民族紛争で犠牲者が出ると、「七十二時間以内の活動開始」目指して医師や看護婦らが飛び出していく。

バングラデシュ、ルワンダ、サハリン、中国＝医師は荒れた被災地や難民キャンプで、赤道直下のテントの診療所でコレラや疟疾と戦う。現地に根をおろしたAMDAだからこその強い医師のように診療はしないものの「コーディネーター」と呼ばれる人たちの活躍があることは、あまり知られていない。

コーディネーターは、緊急援助活動が発生すると医師と共に現地に飛ぶ。悲痛な叫びが上がる被災地を走り、薬や食糧を調達。チームの住居を確保し、現地政府と交渉する。AMDA本部との連絡も欠かせない。

「AMDAの活動が成功するかどうかは、コーディネーター次第だ」と強調する菅波。コーディネーターがつとめる広い視野を持つ人材を養成する「国際大学」設立構想が昨年持ち上がった背景には、幾多のプロジェクトで痛感したと菅波のそうした思いがあったのだ。

＊　＊　＊

国際貢献と拙速おこし。「世界が必要とする商品に、それがAMDAの原点」。菅波の口癖だ。だから、「国際大学」の設置場所も岡山県内だと聞くと眉心をかける。

数十億円に上ると見られる事業費をどう調達するか、学生が集まるだろうか。卒業生の進路は確保できるのか。

「国際大学」は今、反響はたくさんあり、例えば、「世界に通じる専門知識と技術を身に付けたい」と、ユニークな大学」「ボランティア意識の高揚と波及効果は大きい」「市民活化に役立つ」「県内市町の意見や企画担当者が関心を寄せ、読数の打診を問い合わせは十件を超えた。

AMDAの設立から12年。バイタリティー抜きで国際人道援助に飛び出してきたAMDAは今、「国際大学」の〝夢〟実現という新たな挑戦に踏み出している。

藤事務局長）中で、反響はたくさんあった。「時代の要請」合った

AMDAは医師ボランティア団体です。しかし、活動しているのは医師や看護婦さんばかりではありません。主婦や学生、会社員、お年寄り…いろいろな方が本部事務局でボランティアをしてくださっています。お願いする仕事はたくさんあります。例えば一般事務、ニュースレターの編集補助や発送、資料整理、翻訳、ワープロ入力、企画・催事の準備、アマチュア無線、コンピューター通信…などです。緊急救援プロジェクトでは医療品の寄せられた被援物資の仕分け作業なども行無償でお手伝いいただければ大変ありがたいです。

AMDA事務局　☎608 5・284・7730

無償の行為だけど〝心の報酬〟得られる

会講演会

AMDAの講演に感動

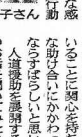
ボランティアの〝心〟を訴えるAMDAの津曲医師＝総社市

助け合って生きてこそ幸せ

総社市PTA連合協議会母親委員会会長　加百　智津子さん

世界の子供たちに笑顔が戻るまで頑張る。総社での講演で津曲先生はこう話されました。ボランティアは自分のためにするもの、とも言われました。ボランティアへの考え方が変わり、神様を教えられたようでした。

私は講演会の翌日、岡山空港に出掛け、AMDAが中国・雲南省の地震被災地へ送る救援物資の仕分け作業をさせていただきました。これまで、AMDAの活動は〝他人事〟のような感じがありましたが、実際に行動をしてみると、とても身近な存在になり、また、心に充実感が広がったようでした。



加百　智津子さん

世界には、災害や紛争などで命の危険にさらされ、逃げまどう人がたくさんいます。恵まれた日本に住む私たちの中に、無関心でいすまされる風潮があるのではないでしょうか。それは、私たちの生き方を見て育つ子供たちに現れてはいないでしょうか。

地球規模のボランティアを岡山で行っているAMDAの活動を通じて、私たち大人、そして子どもたちが、世界で起こっていることに関心を持ち、世界的な助け合いにかかわってはなるすばらしいと思います。

人道援助を展開するAMDAのお話を聞いてみたい、と頼い講演会でしたが、「人は助け合って生きてこそ幸せ」と考えさせられた一時間半でした。

若い医師八十人が、AMDA医師の津曲義司さんの話に、身ひろぎもせずに聞きべった。

2月10日、総社市PTA連合協議会母親委員会が同市立図書館三階で開いた講演会。

「困っている人がいる。何かしてあげたい気持ちが起こる。自分が役立つのがうれしい」

「ボランティアは自分のためにするもの。成功しようが失敗しようが、あとで自分の成長を感じることができればそれでいい。無償の行為だけど、〝心の報酬〟が得られる」

「ボランティアには、原則が一つある。それは相手の自立を助けること。例えば、魚を獲るより魚の釣り方を教えてあげた方がよい」

講演会のあと、本部には手紙などで感想が寄せられる。

「自分も何かをしたい」「ボランティアを自己満足のためだけにしてきたが、相手の自立を助けるものだと聞いてその通りだと思った」「心の報酬がある言葉をきっかけに、感動動かされた真なる思いが盛られている。ボランティアの心が、岡山で広がっている。アムダのスタッフは、それがうれしい。

＊　＊　＊

AMDA本部には、講演依頼が数多く舞い込む。今年2月は二十五件。津曲のほか看護婦や事務局員らも出掛ける。

依頼は小・中学校や高校、そしてPTAや老人クラブなどから。AMDAの講演は、内戦の難民キャンプや大震災の被災地で急命に取り組んだ医療援助などの体験を語し、ボランティアの〝心〟を訴える。

講演会のあと、本部には手紙などで感想が寄せられる。

「自分も何かをしたい」「ボランティアを自己満足のためだけにしてきたが、相手の自立を助けるものだと聞いてその通りだと思った」「心の報酬がある言葉をきっかけに、感動動かされた真なる思いが盛られている。ボランティアの心が、岡山で広がっている。アムダのスタッフは、それがうれしい。

たった一人でもいい。ボランティアの心が、岡山で広がっていくことを願っている。

国際貢献パワー　おかやまは動く

アジア医師連絡協議会
AMDAからの報告

シリーズ企画 No.4

このシリーズについてのご意見、ご感想を左記にお寄せください。

〒700 岡山市駅前2－1－23　山陽新聞社広告局「アムダ係」

〈企画・制作　山陽新聞社広告局〉